

佐土原キリスト教会・2020年12月13日・アドベント礼拝説教

聖書箇所：マタイの福音書1章18～25節

説教題：神共にいます

大淀教会の牧師をしておられた本間正巳という先生の奥様が高齢になられてアルツハイマーを病まれました。別人のように変わってしまった。でも、その奥様がある日、突然祈り始めたそうです。「色々なことが分からず、物事が上手に出来ない自分の不甲斐なさを赦して下さい…それでも、こんな私を愛して、導いて下さるイエス様に感謝します…これからの私の降りて行く道を、なだらかな道として下さい」。お嬢さんは、このお母さんと神が共にいて下さる、そう気づかれたそうです。神は共にいて下さる方であることを教えられました。

今日の箇所も「神は共におられる」というクリスマスのメッセージを語ります。主人公は、イエス様の父親となるヨセフです。ヨセフの話を通してクリスマスへの備えをしたいと思います。

1. クリスマスの語りかけ(1)～「神の恵み」

この箇所の中心的な出来事は「ヨセフが夢を見る場面」です。夢というのは私達の心の深いところにある心理を反映していることが多いそうです。ヨセフにも、夢にまで見るようになっていた深い悩みがあったのです。それは「婚約者のマリヤが子供を宿している」ということでした。ヨセフは、誰にも言えずに苦しんでいたのです。19節「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた」(19)。「正しい人」、「掟に従って結婚までは体の関係を持っていなかった」と言うことです。それにも拘らず婚約者が子を宿した。どんなにマリヤを愛していても、そのまま結婚するにはあまりにも大きなことでした。ヨセフは「夫」と呼ばれています。ユダヤでは婚約は結婚と同じ重みを持っていて公に宣言されました。婚約を解消する時も、通常は理由を公にして離縁を宣言するのです。そうするとマリヤは「婚約中の夫がいながら姦淫の罪を犯した」として石打の刑です。ヨセフは傷つきながらもマリヤの命だけでは守ろうとした。理由を公表しないで「私の勝手に婚約を解消します」ということにしようと決めました。「子供を宿らせておいて落ち度もないのに離縁するとは何事か」と世間から非難されます。その非難を受けてでもマリヤの命を守ろうとした、それがヨセフでした。後にイエス様が『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない』とはどういう意味か、行って学んで来なさい」(マタイ 9:13)と言われましたが、憐れみに生きたのです。しかしそれは、悩んで苦しんだ果ての決断だったでしょう。だからこそ、夢にまで見たのです。しかし彼の夢に天の使いが現れて事の真実を告げるのです。言うならば、彼は悩みの中で神と出会うのです。ある神学者が言いました。「人は誰も、他の人に知らせることが出来ない心の片隅を持っている。そこには、誰にも言えない秘密があるかも知れない、恥じていることがあるかも知れない、辛い罪責感があるかも知れない、深い悩みがあるかも知れない、悔しさがあるかも知れない。しかしその誰にも知らせることの出来ないような心の片隅で、人は神に会うのだ」。誰はばからず人前で言えるようなことにも神は働かれるでしょう。しかしヨセフは、一人で悩んで苦しんでいる、そ

ここで神に会ったのです、そして神の導きを受けた、このことは私達に何を語るのでしょうか。

ストラボーンという学者が世界中の民族を調べて回りました。その結果「世界中のどの民族も『神』を持たない民族はない。人間は何者かを拝もうとしている」、彼はそう言いました。旧ソ連にブレジネフという指導者がいました。ソ連が「神を信じない」思想を謳っていた絶頂期です。でもブレジネフが死んだ時、奥さんは彼の遺体の上で十字を切ったのです。思想や哲学ではどうしようもないものがあるのです。「神なんか信じない」と言っている人も、イザとなったら「神様！」と叫ぶと聞きます。人は神を求めるのです。それにも拘わらず、どうして人は神をもっと近くに感じることが出来ないのでしょうか。聖書は「人の罪が私達を神から遠ざけるのだ」と言うのです。具体的な罪もそうですが、人間には妬みや自己中心があります。「原罪」というどうしようもないものがあるのです。その罪が私達を神様から遠ざけるのです。ここでイエスは「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です」(21)と、「罪の問題を『イエスが解決して下さる』」と言われているのです。どうやって解決して下さるのか。20～21 節に「ダビデの子ヨセフ。恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい」(20～21)とあります。これは神がヨセフに「マリヤの産む子を自分の子として迎えて欲しい」と頼んでおられるということです。その意味でイエス様は、確かに神様の子ですが、一方でヨセフに「自分の子」として迎えられた方なのです。「ヨセフに迎えられた」とはどういうことでしょうか。1章1節～17節に「アブラハムから始まる系図」があります。系図の最後に「ヤコブにマリヤの夫ヨセフが生まれた」(16)とあります。そのヨセフにイエス様は迎えられます。言うならばイエス様は、ヨセフに繋がるところの人間の歴史に入り込んで下さったのです。その系図は、名君と謳われるダビデ王さえ家臣の妻を奪ってしまったことを記す、人間の罪深さを描く系図なのです。イエスはその人間の罪の歴史に入り込み、人間の罪の全部を引き受けて十字架に掛かり、私達の罪に下るはずの罰をご自分が受けて、私達の罪の問題を解決して下さったのです。神様と私達の間には橋を架けて下さったのです。私達と神様との間の仕切りは取り除かれました。誰でもイエス様を信じるなら、その人は神様と繋がることが出来るのです。苦悩の中で神に会える(神に触れられる)ようになったのです。いや、苦悩の時だけではない、「神われらと共にいます」、神がいつも私と(あなたと)共にいて「あなたを強め、助け、守って下さる」、そういう時代がイエス様の誕生で始まったのです。それがヨセフの夢が語ることです。

藤井美和という方は、マスコミの仕事に夢中になっていた 28 歳の時、突然、難病に襲われました。全身の神経障害、麻痺が呼吸筋まで広がり、呼吸が出来なくなった、死に直面したのです。これまで人を押しつけてでも仕事に邁進する生き方をして来た。神様から「お前はそれでよいのか」と問われていたのです。そんな時の病気です。自分は神が招かれた時には「ハイ、ハイ」と言って天国に行けると思っていた。ところが、現実に死に直面した時には「今死んだら何もならない、死にたくない」と叫んでいる自分がいるのです。彼女は涙を流して祈りました。「神様、どうかもう一度いのちを与えて下さい。そうしたら今度は、喜んで天国に行けるような生き方が

したいのです」。祈りは聞かれ、奇跡的に呼吸が出来るようになりました。しかし医者からは「一生寝たきりの生活を覚悟して下さい」と言われます。でもそんな中で、なぜか生きる意欲が甦るのです。神様の御業です。リハビリに励んだ結果、手足の麻痺は奇跡に回復し、5か月後には杖をつけて歩けるようになります。彼女は、病気の人を抱える精神的な悩みがいかに大きいかを知って、快復した後、そういう人の心を支えるソーシャルワーカーの道に進むのです。彼女は言います。「人生は一寸先に何が起こるか誰にも分かりません。しかし…行き詰まったように見えても…神様に祈り求めるなら、次の道は既に備えられていることが分かるのです…あの朝、私に再起のいのちを下さった神様は、どんな状況の中でも共におられ、『私がついているよ』と語りかけ、励ましてくださるのです」(藤井美和)。「『その名はインマヌエルと呼ばれる』(…神は私達たちとともにおられる、という意味である) (23)。誰の人生にも、自分の力ではどうにもならないことがあります。でも人は、苦悩の中で神に出会い(神に触れられ)、神と共に生きて行くことが出来るようになったのです。悩みの中で神に会えるということは、どんな時にも望みを捨てなくて良いということではないでしょうか。イエスの誕生によって、本当に神が共にいて下さるようになった、それがクリスマスの語りかけです。

2. クリスマスの語りかけ(2)～「神の招き」

クリスマスにはもう1つの語りかけがあります。「神の招き」です。

この後ヨセフはどうしたのでしょうか。イエスを自分の子として身に引き受けました。ベツレヘムに行き、イエスの生まれる宿を探して歩いたのです。イエスがヘロデ王に狙われた時には、エジプトへの長い旅を、身を挺して守ったのです。何の権力もない大工です。神はその彼に「私の子を守ってくれ、引き受けてくれ」と委ねられた。そしてヨセフは「神と共に働く者」とされたのです。神の方から始めて下さった恵みの歴史です。しかしヨセフはそのようにして、その歴史を荷う人間として神の恵みの歴史に入り込むことが出来たのです。クリスマスは私達に「あなたも神と共に生きて行けるようになった」と恵みを語ります。それだけではなくて、私達をも「あなたにも神の恵みの歴史を荷って欲しい」と招くのではないのでしょうか。言い換えると「神と一緒に働いて欲しい」ということです。

「神の恵みの歴史を荷う」、色々な形があると思います。お一人びとりが既にそれぞれ示されたことを通して恵みの歴史を荷っておられることでしょうか。色々あると思いますが、昨年来て下さった佐藤彰先生が下さった冊子の中にある姉妹のことをお分かちして終わりたいと思います。

この姉妹は、70歳を過ぎてから乳癌の大手術を受けた後、「まだ動く指をもって主に仕えたい」とワープロを購入して、それで教会の奉仕を始めたそうです。その姿が痛々しいので役員会が助言をしました。「姉妹、あなたは病身です。奉仕をせいで療養して下さい」。その姉妹は涙を流して「私から奉仕を取り上げないで下さい」と訴えたそうです。佐藤先生も「この人は倒れる瞬間まで奉仕をするつもりなのだ」と悟って、もう何も言わなかったそうです。その生き方には色々なご意見があると思いますが、でも、恵みの歴史を荷おうとする思いが伝わって来るのです。「神

の恵みの歴史を荷う」ということには、クリスマスに始まった神の恵み御業を何か分かれ持つという働きもあるのではないのでしょうか。同じ姉妹の話です。亡くなる半年ほど前、彼女は自分を導いてくれた宣教師に再会するためにアメリカの田舎町の教会を訪問しました。そこでこう語ったそうです。「皆さん、この先生を日本に遣わして下さい本当にありがとうございます。私は様々な辛いこともありましたが、今は福音の力をしみじみと実感しています。私の体内には4つの癌があります。けれども死ぬことが全く怖くありません。それは先生が私にキリストの福音を伝えて下さったからです。皆さんも、もしイエス様の本当の力を知りたいとお思いなら、癌になってみて下さい」。佐藤先生はその宣教師の涙を見て「このたった1人の日本人に会うためにでも、日本に行ってよかった」、そう語っているのを感じたそうです。その姉妹から、家族へ、隣人へと、福音は伝わって行ったのです。神の恵みを証しすること、それも恵みの歴史を荷うことではないのでしょうか。色々な形があると思います。無理をする必要は何もありません。どんな形でも良い、私達も神の恵みの歴史を荷わせて頂きたいと願います。そこに、生きる意義、張りのようなものもあるのではないのでしょうか。

聖書には「イエスがもう一度、地上に来られる」という「再臨」の約束が預言されています。クリスマスは、再臨を待望する時でもあります。やがてイエス様が、空の扉を開けて入って来られるのです。その時、イエス様から「よくやった。良い忠実なしもべ(として生きたな)」(21)と言って頂けたら、どんなに幸いでしょうか、大きな喜びでしょうか。